

戸俊一、杉本茂春ら6名に呼びかけた。

こうして昭和42年1月28日、第一回歯学史集談会が神田駿河台の日本大学歯学部で開催された。

この時、山田は、「世相と歯科料金」との演題で、明治期の歯科料金が、物価に比して高価であった事から、義歯を入れるなら抜歯は無料、金冠を入れるなら支台歯の処置はとらなかった事や、医師会や無資格者との抗争の歴史も報告している。

歯学史集談会はやがて歯科医史学会に成長して行く、彼はその第一の功労者の一人であった。

15) 落合靖一先生を偲ぶ

Dr. Seiichi Ochiai is Remembered

タナカ歯科 田中 晃伸

Akinobu Tanaka, TANAKA Dental Clinic

日本における小児歯科のパイオニアである落合靖一先生が昨年1月29日にご逝去された。先生の生前のご功績は誰しもが知る所であるが、再度、先生を偲びご経歴を含め紹介させていただいた。

落合先生は昭和3年に東京日本橋の繊維問屋の長男として生まれ、大東亜戦争の終盤である昭和20年4月に東京医学歯学専門学校（現東京医科歯科大学）に合格された。そもそも先生のご実家は繊維問屋であったが、徴兵猶予が認められる医学系学校を目指したのが、受験の動機であると言われていた。

大東亜戦争敗戦の焦土の匂いがまだまだ残る昭和24年に同校を卒業され、そのまま大学に残り、2年後に新設された東京医科歯科大学大学院の第1期生として第三保存学講座に進学された。

元来文学青年であった先生は、外国文学にも大変興味を持ち、青山学院大学米英文学部にも籍を置かれていた。

戦後、アメリカによる日本の復興政策のひとつとして人材育成のためのフルブライト奨学生に、先生は昭和29年に歯科医第1号として合格し渡米することとなった。

このフルブライト留学において、当時医科歯科大学の長尾優学長よりGHQからの指令で新制大学の教科として小児歯科学講座を置くようにとの

通達があり、アメリカに人材派遣をする矢先の合格であったために、落合先生にその白羽の矢が立ち、ボストンのフォーサイス小児歯科研究所への留学が決まった。

フォーサイス研究所の設立は1916年（大正5）に遡り、世界でも有数な小児歯科の医療施設である。創設された由来は皮製品業で成功したM.B.フォーサイスが、ある旅行中のホテルにおいて隣室で歯痛に苦しむ子供に会ったことがきっかけで、遺言として「私の遺産を世界中の子どもから、歯の痛みを無くすことに使って欲しい」といういきさつで設立されたものである。

フォーサイスは小児歯科診療の実践と治療法を勉強する1年であったが、小児歯科学の体系を理解するためにイリノイ大学大学院に進学することとなった。

当時のイリノイ大学にはアメリカ小児歯科界の大ボスであるMasslerや、乳歯の新産線を発見したSchour、また最初にセファログラム分析を考えたBrodie、組織学で著明なOrbanなど日本の国家試験で今なお有名なお歴々がおり、その元で学ばれた。

このイリノイでは学問はもとより生活においてもよきアメリカを実感されたようである。

東京医科歯科大学ではすでに昭和31年5月に小児歯科学教室が設置されており長尾学長から帰国を催促され、マスターを目前に帰国された。

昭和31年8月に帰国し、以後、東京医科歯科大学の小児歯科学教室の発展に貢献される訳である。教室における人材の育成や学生講義において、小児歯科学に関する体系的な教材が必要となりJ.C. Brauer 著小児歯科学の翻訳出版に至った。

この本はまさしく小児歯科学のバイブルと言っても過言ではない。

さて、学会設立に関してであるが関東の大学を中心に集談会からスタートし、昭和38年に第1回日本小児歯科学会を発足された。先生は裏方としてその創設にご尽力された訳である。

学会誌の発行においても先生の足跡があり、日本小児歯科学雑誌第1巻第1号第1編は落合先生が投稿された“乳歯齲蝕の分類とその治療法”である。

これだけ小児歯科界において研究・教育・人材

育成にご尽力された先生であるが、昭和42年に大学を辞し、東京四谷にて日本で初めての小児歯科専門で開業されることとなった。

演者のあくまでも推測であるが、大学を辞した理由として当時教授であった山下浩先生との年齢差ではないだろうかと推測する。山下教授との年齢差は十数年であり、もし、二代目教授に就任されてもすでに50歳を過ぎた身であるため、日本の小児歯科をリードしてきた先生の自負として、他大学の小児歯科教授の後塵を拝するよりも、敢えて日本における最初の小児歯科専門開業医の道を選んだのではないかと推察する。

さて、開業当初“落合小児歯科”ではなく“わかば歯科（落合小児歯科研究所）”であった。当時まだ小児歯科標榜ができなかった経緯からの小児歯科専門にこだわった先生の苦肉の標榜名であった。

小児歯科臨床の最前線にお立ちになった先生は、診療室において重度齲蝕の患者には全身麻酔下での集中治療なども行っている。この全身麻酔下治療では当時医科歯科大学歯科麻酔学教授で先生の同級生でもあった久保田康耶先生が協力をしている。

また治療ばかりではなく診療室においては母親教室さらにはテレビ番組にも出演され、子どものむし歯予防の重要性を説かれていた。

このようにランパントカリエスの小児には効率的に全身麻酔での集中治療を行うとともに、カリエス発症要因に影響を与える家庭・社会に啓蒙活動されたことは、昭和40年代の小児の歯科的問題背景を考慮されており、まさしく特筆すべきことである。

また、アメリカ留学時の人脈により多くのアメリカの教授達を招きセミナーや講演を開催し日本の小児歯科医達に感銘を与えていた。

その後、昭和63年に日本小児歯科学会の認定医制度の導入とともにその第1号となり、小児歯科の創設・発展とともに歩まれてきた。

さらには小児歯科だけではなく日本歯科医療管理学会、日本歯科医学教育学会など他の学会でも要職に名を連ねられた。まさに戦後日本の歯科医学を築き支えたお一人であることは、誰しも疑うことはない。

このように多くの友人達とも交友を重ね、後進

を指導された先生であるが、メヌエール病を病み、また乳歯の根管を見ることができなくなったという理由で平成8年に閉院引退された。

引退後は好きな文学に没頭し平成23年には小説『魔曲の幻影』を出版されている。

これほど多才な先生でありましたが、残念ながら、本年1月29日85歳でご永眠された。2月2日にとり行われたご葬儀には先生の60年以上の朋友である元昭和大学歯学長福原達郎先生が弔辞を読まれお見送りされた。

最後に、落合靖一先生の最も大きな功績は小児歯科医療の目的である「健全な咬合を誘導することが小児歯科の究極的目標である」すなわち『咬合誘導』という概念を確立したことであり、この概念は今も小児歯科医療の確固たる目標とされている。

16) 人吉市「一井正典“青雲の志”」育成事業

高校生、米国派遣の成果について

Hitoyoshi's high school boys went to take part in a training project in California, following in Dr. Ichinoi's successful footsteps.

ジュグリット先生を讃える会 松本 晋一

Shinichi Matsumoto, Member of Dr. Jugritt Honoring Association

1. 帰国と派遣報告会

派遣された高校生の7名と引率者2名は、6日間の米国研修を終え、3月30日にサンノゼ空港から成田経由で無事に福岡空港に帰国し、4月4日には田中市長や末次教育長への帰国報告がなされた。そして月末30日には本事業の成果の全体報告会が市役所会議室で行われ、市長挨拶を皮切りに父兄や市民、教育関係者約60名が聞き入る中、生徒7名全員によるスライドを用いた熱心な派遣報告会（プレゼン）がなされた。この報告を受けて、出席した人吉高校校長及び出席の父兄らのコメント並びに末次美代人吉市教育長の講評があった。以下は全体報告会の概略である。

1) 現地での訪問順序

第1日目：IT企業・アップル本社見学

地元人吉関係者とリンブルック高校